

生態史としての南島文化

著者	小野 重朗
雑誌名	沖縄文化研究
巻	14
ページ	1-53
発行年	1988-03-05
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015653

生態史としての南島文化

小野 重朗

北から南へ、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島と八百キロにわたる弧を描いて連なっている南島は幾つかの文化圏として区画することができであろうが、私はこれらの島々の民俗を調べてきた者として、島々をその民俗文化の上から二つに分類することができると考えている。簡単な表現をすれば山地の島と平地の島とである。これらの島々は地質的には古生層、中生層の水成岩質でできた山地からなる島と、隆起珊瑚礁を中心に新生代の地質からなる平地の島とに大凡に分けることができる。

その大凡を言ってみれば、奄美諸島では奄美大島と徳之島とは山地の島、喜界島、沖永良部島、与論島は平地の島になり、沖縄諸島では、沖縄本島の本部半島以北の国頭地方が山地の地域に、中部、南部は平地の地域に両分されており、離島では伊平屋島や久米島は山地の島とみることができよう。先島諸島では、宮古列島は平地の島、八重山列島は山地の島に大凡は分類できる。つまり山地の島と平地の島とが交錯し合って南西諸島は構成されていると言える。

そして、これらの山地の島は保水性のある地層のため湿潤でシイ、タブ、イジュのような照葉樹がよく育ち、稲作も可能で少々の水田もある。一方、平地の島の地質は保水性が少なく大樹は育たず、アダン、ソテツ、シャリンバイ、そして、ススキ類などの植生が茂り、水田はなく、麦作、甘蔗作の畑耕作が行なわれ、海を中心にした生活は盛んである。

このような二つの大きく異った生態的環境の中での、民俗文化は鮮明な相違をみせている。そこでこれに照葉樹山地型文化と海洋性平地型文化と名称をつけて、それらの民俗現象を述べ、二つの地域文化を比較し考察してみよう。

一、神・祭場・来訪神事

1 照葉樹山地型

照葉樹山地型の島にみられる神観念、祭事、神人などについて幾つかの事例を羅列的に挙げて、その特徴を考えてみよう。

① ケンムン・キジムン

奄美大島には九州本土の河童に似たケンムン（木の者、木の妖怪の意）、沖縄本島国頭にはキジムン（同じく木の者）という妖怪がいる。例えば奄美大島瀬戸内町西阿室では「ケンムンは赤ん坊ほどの大きさに頭の毛は長く赤い。口からでるよだれは青白く光る。ガジュマルやアコウの大木に棲んで

いて、その木を伐った人の目を突いて祟る。塩たき小屋、砂糖小屋の火にあたりにきて、薪を切った
り運ぶ手伝いをする。海にでてイザリ漁（夜灯をともして魚を突く漁）が上手だが、章魚は苦手だ
という。沖縄、国頭郡大宜味村喜如嘉では「ブナガヤ（キジムン）は部落内ではフクギ・ガジュマル・
アコウ等の古い大木にいる。山野の大木にも多く住んでいて、特にウンダ山の雑木林はブナガヤヌシ
（ブナガヤの巢）と言われ、そこから部落の木々にも下りて住みつくのだと言われる。田嘉里ムチマ
タ（屋号）の先祖が、山の木を切り出しに行っているうちにブナガヤと仲良くなり、彼が山に行くと
いつもブナガヤがついてきた。ブナガヤは背丈は低いが力持ちで、彼が家を作った時は、夜のうちに
山の太木を担いで持ってきてくれた」。『喜如嘉の民俗』^{〔1〕}

この伝承にあるようにケンムン・キジムンは山地に棲む妖怪で、山を下って人里近くの照葉樹の大
木に棲みつくが、河童とはちがって川を棲家とはしないし、河童と比べればだいぶ妖怪性が強く山の
神に近い存在だと言えよう。

②奄美大島のカネサルカネサルの神

カネサルというのは庚申の意で、旧暦八月の初めにくるアラシツ（新節）の後の庚申の日で旧十月
になることもある。この日には奄美大島の集落ではひろくカネサルの神が山から人里に下ってくると
恐れる。

瀬戸内町西阿室では旧十月の頃の庚申の日をカネサルといい、この日は山の神の散歩の日といい、

山に行ったり、外を出歩いたりしてはいけないという。ある人がこの日に山畑のヤドリ（泊小屋）に泊まっているとオボツ山（神山）の上で鉦がなるのを聞いて恐ろしく、その後は絶対にヤドリに泊まらなくなった。明治三十年頃まではカネサルの日にはシマガタメ牛を殺すものだった。年に一頭の牛を部落費で買い、アタリという当番の家で飼っておいて、カネサルの日には浜に引きだして殺し、その肉を全戸に配って食べる。そのヒラボネ（肩胛骨）二枚を左ないの縄に下げて、山から集落に入る道の入口の両側にバショウとダラギ（棘の多いタラノキ）を植え、縄を張って牛のヒラボネを下げておいた。牛の肉を食べてカネサルの神の危害を受けぬようシマ（島、集落のこと）を固めるのだという。

瀬戸内町須子茂では旧暦十月の最初の庚申の日をカネサルといい、この日は山から神が下って海に魚を捕りに行く日であり、人里にも入ってきて人々に害を及ぼすので、山にも海にも行つてはいけないという。大正末まではこの日集落で一頭の豚を殺して、その日に祭りをするノロなど神人にも食べさせ、集落民全員に分けて食べた。この豚をカネワー（庚豚、ワーは豚）といった。この豚のヒラボネを集落に入る二本の道の入口に下げた。現在は豚を殺す代りにカーサモチ（モチゴメを水にかし臼でついて粉にしたものを芭蕉やサニンの葉に包んで蒸したモチ）を集落として、また家々でも作り、豚肉の代りにこれを食べ、子供たちに食べさせて、この日の災害を除けるようにする。集落の入り口には豚の骨を吊る代りに、このカーサモチを食べたあとのカーサの葉を竹につけて、ダラギの枝、トベラの枝、ススキの葉などと共に立てて悪祓にする。

このようなカネサルの民俗は奄美大島のほぼ全域に広がって見られる。この庚申の日は山中の山の神、テヘンカン（嶽の神）の活動する日で、山中は勿論、山から海や人里に下ってくるとされて、この神は人々にひどい危害を加えるとされる。この神の災厄を祓う方法は牛、豚などを殺して、集落の全員で食べ、その骨を山からの下り口に下げることであった。これを島固めというのは、牛、豚の肉には人々の心身を堅固にする働きがあつて、そのため島の防備が固まるという意味であり、集落の入口に牛などの骨を掛けるのは、侵入しようとして山の神がこれを見て、島の防備が固いことを知って侵入を断念するためと思われる。この防厄の手段は牛・豚の肉を食べることから、カーサモチを食べることに転換したことが分る。このカネサルの日にカーサモチを食べる民俗は現在もよく行われている。この山の神信仰の生き続けていることを教えている。

③ 祈禱と訪れてくる神々

これも奄美大島を中心に伝承された祭事であるが、後述のように、沖縄本島の国頭地方でもあったことが知られている。集落に重大事があつてノロたち神人が祈禱すると神山から複数の神が降りてきて厄祓いなどをして帰って行くのである。事例を挙げておこう。

瀬戸内町木慈では大正の末ごろまでは集落背後のオボツ山という神山から神々が下ってくる行事があり、人々はみなほんとうの神と信じていた。赤痢、チブス、風邪などの伝染病のはやる時など、キトウ（祈禱）ともモノバライ（厄祓い）とも言つて、ノロたち女神人がターブイという唱え言をする

と、その夜になってオボツ山の上から鉦がなって神々が下ってくる。人々は家の灯を消して道に並んで座って迎える。下ってくるのは六、七人の神で、まずヤリモチカンサア（槍持ち神）、これは背が高く大きく、槍棒を突きガラガラと鳴らして先頭を進み、人々をみるとヤロウカ、ヤロウカ（攻撃しようか）とする神という。ウフスデカンサア（大袖神）が三人ほどいたが、これは白く長い袖を垂らしていて、この神は袖をひろげて人々をその中にかばってやろうとするという。三人共に鉦をもって打ち鳴らして進む。ジョウギモチカンサアは長い建築用の木の定規をもった大工神で、この神は敏捷に動き回る。神々の先頭はノロが白衣をつけて先導し、イガミなどの女神職が神々の後を守って進む。神々はこうして鉦を打ちながらずっと回り、やがてオボツ山に帰って行った。この神々が下ってくるのはこのような祈禱の時と、ノロの祭礼に用いられるアシャゲやトネヤを新築したり、その屋根をカヤで葺き替えた時にも、その作業が終わろうとする頃きまって山から鉦の音が鳴りはじめて、やがて神々が山を下ってきた。人々は仕事をやめ、地面に座って頭を地につけて迎えた。下ってくる神は祈禱の場合と同じだが、特にジョウギモチカンサアは活発に動いて、アシャゲの柱に定規をぴしぴし当てる長さを調べたり、屋根に上がってイラカの様子を調べて回ったりしてから、やがて神々は鉦の音と共にオボツ山に帰っていった。昭和になってからはこの神々の下りてくることはなくなったが、これは若いノロになって神々を招くターブエが唱えられなくなったからだと言われた。

瀬戸内町瀬相では、集落の背後に近いオボツ山、やや離れた森山という二つの神山から神が下って

きた。オボツ山からはホソ（天然痘）やハシカなどの流行病が入ってきた時に、三、四人の神が下ってきた。その中には子供たちにハシカを与えるハシカノカンサアもいた。夜になり山上で鉦がなりはじめて、山から棒を持ったり、扇をひらいて踊るようにして進む神などが下ってきた。集落の一軒ずつの家を回り、戸を解放させて祓う。家人は庭に出て座り、頭を地につけているものだった。海に近いモリヤマ（森山）からは、船と関係のある、例えば難破船があった時とか、村有船が進水した時とかに神が下ってきて、その船を祓って回るものだった。また集落のアシャゲ、トネヤなどの建物のカヤ屋根を葺き終わる頃になると神が下って葺き方を点検したり、祓って帰って行った。昭和五七年にはこの行事を実際に見た古老は何人もいたから、大正十年頃までは行なわれていたことが明らかである。

これらの事例のように、この祈禱という行事は奄美大島の瀬戸内町、宇検村、大和村などの諸集落では明治末から大正年代にかけて広く行なわれた神事だが、定期的な祭りではなく、この神来訪神事は次の二つの時に限って行なわれる。

一つは集落に病氣（チブス・ハシカ・風邪・天然痘など）が流行しそうなとき、火災があったとき、干魘・台風などのときにノロなどが祈ると神が山から下ってきて集落や家内を回る。もう一つは、集落の祭場になるトネヤやアシャゲを新築するとき、屋根のカヤを葺き替える時、集落有の大きな船が進水するときなど、その仕事が完成する直前に神々が山を下ってきて、定規持ちの神（大工神ともい

う)は建物や船の作りを定規を当てて検査し、その回りを巡って祓う。二つは性格を異にしながら、共に災厄を除き祓う点で共通している。

下ってくるのは集落の背後の神山(オボツ山・森山・オガミ山などいろいろの神山)からで、来訪する神は諸事例ではほぼ一致していて、

○定規持ち神は二メートルほどの目盛りつきの角棒をもって建物や船を検査する神。カネジャクガナシといって矩尺を持って検査する例もあり、共に大工神ともいう。

○棒持ち神、棒振り神、槍持ち神は太い長い棒や槍、錫杖のような突けば音のする棒を突いて、神々の先頭をおどしながら祓いながら進む。

○ハベラーカンサアは蝶の神の意で、扇を両手に開いてひらひらさせるとか、長い袖を振って舞うとか、ウフスデカンサア(大袖神)というのも、この別名である。しばしば鉦を打ちながら進む。

ほとんどの例でこの三種の神が一人ずつとか二・三人ずつとか来訪するという。大工神の役目は鮮明だが、他の二神はどのような意味や役目なのだろうか。先の木慈の例で槍持ち神は人々をやっつけようとし、大袖神は人々をかばおうとすると理解しているのは案外正しいかも知れない。悪神的な神と善神的な神とが相伴って出現して、祓いの行事をするというのは来訪神の古い姿を示しているとも思える。瀬相でハシカノカンサーも来訪したというのも注目される。ハシカの神のような災厄神も神山から訪れたということは来訪神の性格をよく語っている。

このような山から下る来訪神は照葉樹山地である奄美大島でだけみられたかという、実は沖縄本島国頭地方（これも私のいう照葉樹山地である）でもみられたことが、佐喜真興英氏『南島説話』⁽²⁾や島袋源七氏『山原の土俗』⁽²⁾に記されている。後者を引用してみよう。

「国頭村安田の人民が新築をして、屋根が全部葺き終えようとする時、祝女や神人が白い衣裳をつけ、白鉢巻をして屋根に上り、葺き終えぬ処を巡りつつ祈願をする。この時人夫や家葺の連中はこの儀式を見てはならぬというので、全部頭を垂れて額づく。若し禁を侵して頭を上げ、神人の所行を見ようものなら盲者となり、一生不幸に遇うと伝えられる。人民は其時幽かに鳴る神々しい鉦の音を聞くのである。それで畑や道に居る者でも額づく。

また大宜味村塩屋では三十年程前までは帆船を新造して、明日は進水式だという夜半に、必ず氏神の森から神鉦を鳴らしつつ数多くの神々が現われ来って、船を巡りつつ釘の打ち方の拙い所には神杖をもって標をつけるものだと思われている。そこで某氏がその神様の正体を見届けようと船底に隠れて待っていた。神様は神鉦を鳴らしつつやがて現われて来た。頭には白鉢巻を締めて後方に垂らし白い衣裳を着た神様が数人現われて新造の船に上って其上を巡り、杖をもってあちこち突つつき回っていた——よくよく見ればこの部落の祝女や神人の仕業であった——」。

ここに記された沖縄本島国頭地方の事例も明らかに山から現実に神が下ってくる例で、奄美大島の場合と同じ神来訪の祭事だが、沖縄国頭の場合は大工神が来訪し新建の家、船を点検するのが中心で、

奄美大島の祈禱の部分はみられないようである。佐喜真氏の例も家、船の落成の時の例である。これは合理的で理解し易い部分が残ったものかと思われる。それと共に沖縄国頭の例はノロなど女神人が神になって出現しているが、奄美大島の事例ではどうも女神人だけでなく男性が神になったと考えられることを指摘しておこう。いずれにしても、この神事が極めて古風な来訪神事であることは言うまでもない。

④安田のシヌグ折目

シヌグ折目またはシヌグは旧暦七月の盆後の頃に行なわれる祭りで、その分布は沖縄本島国頭では安田、安波、楚州、奥、辺戸など東海岸の諸集落、本部半島では渡久地、備瀬、具志堅など、伊平屋諸島では伊平屋島の田名、我喜屋、島尻、伊是名島の伊是名、仲田、諸見など、沖縄中部の東の離島の伊計島、平安座島、浜比嘉島などである。奄美諸島の南端の与論島にも現在シヌグが行なわれており、沖永良部島にも明治初年まであったことが知られている。

代表的なシヌグと言われる国頭郡国頭村安田のシヌグ折目の行事を略記しよう。ここのシヌグは隔年ごとの旧暦七月の初亥の日に行なう。シヌグのない年にはウンジャミ（海神折目）を行なうが、これについては別記。シヌグは三日にわたる行事だったが、現在は二日で行なう。初亥の日には集落のアシヤギというカヤ屋根に壁も床もない祭屋が清められ、その前のシヌグマーという庭にシヌグ旗が立てられる。「祈豊年」と大書した幟に吹き流しが添えられ、枝垂れ柳の造花が頂につけてある。午

後から集落の男たちは子供も大人もそれぞれ家系によって決まっている三つの山に分れて登る。山の名は北がササ、西がメーバ、南がヤマナスで、山に入ると男たちは半裸の上にワラのガンシナ（鉢巻状のワラの輪）を頭にのせ、ワラの帯をし、それに山のシイなどの枝葉や羊歯の葉をさして頭から身体まで緑の葉で被う。特に頭には赤い総状の実をつけたミーハンチャー（和名ゴンズイ）の枝をさして飾る。身の丈より高い木の柴枝を持つ。扮装を終えたと列を作って山頂に向かって坐り、太鼓を合図に山の方を拝み、海の方を向いて拝む。次に円陣を作り、回りながら木の柴枝で地面を叩き「スクナーレー、スクナーレー」と唱える。

これで山での行事は終り、メーバ山からの太鼓の合図で三つの山から同時に出発し、列を作って山を下る。先頭に太鼓打ち、それから小さい子供を前に順に列を作って、「エーヘーホー」と唱えながら山を下る。三つの列がそれぞれ山を下った所には、その組の主婦たちが酒などの飲み物を用意してサカンケー（坂迎え）をする。三つの列は合流し、シヌグマーに集まっている集落の人々、主に婦女子たちの群を左回りに巡りながらエーヘーホーを唱えて一回りすると合図で、手に持った柴枝を振り上げて人々の体を叩き被う。回っては叩き三度くり返す。次にはアシャギ前に行き、並んで坐っている男女の神役の人たちを同じように三回叩いて巡る。昔はこの後手分けして集落の家々を回って、部屋の中をエーヘーホーを唱えながら柴枝で被って回るものだった。近年はそれを略し、行列は集落の中を通過して、東の海辺に行く。砂浜に坐り、山の方をまた海の方を太鼓の合図で礼拝する。それから

子供も大人も海に入ってゆき、頭に飾り、身にまどっていた柴や木の枝や木の実などをみな海に流し、人や家を祓った木の枝も流してしまい、体を潮水ですすぐ。それから男たちは三々五々と山側の流れ川に行き真水で身をすすぐ。この川からの帰りはシヌグ旗を先頭に女たちの歌と踊りに先導されてシヌグマーに帰り、これで昼の行事が終る。

午後四時頃になると男神人、女神人たちはアシャギとニードーマ（根所で火の神を祀る）とに供え物をし豊年と集落の安全とを祈る。それが終る頃になってシニグ祭りの余興のようにして「田草取り」「ヤーハリコー」「ウスデーク（臼太鼓踊）」が村人によって行なわれ、人々は酒と御馳走を持って集まり見物する。「田草取り」は男女の青年がワラ鉢巻にワラダスキ姿で列を作り、三味線歌に合わせて腰をかがめて手で田草を取る仕草をしながら進む。ヒンメーモチ（昼飯持ち）が大きなマグ（籠）を負って踊りながら食物を運ぶ。「ヤーハリコー」は一本の長い丸太に何本もの縄を結び、男女の青年がその縄を持ってヤーハリコーの掛け声と共に右へ左へと丸太を運び、終りに丸太をもってアシャギの屋根にのし上げる。この間中、水桶で海水をかける仕草をすることからも、この丸太は船を意味しており、その航海の行事であるらしい。「ウスデーク」は広場で婦人たちが、紺地の着物に白鉢巻姿で、大きな輪を作り、何人かが手にもって打つ鼓に合せて優雅に踊るもの。これが夜まで続き第一日が終る。第二日は夕方からウスデークと相撲が行なわれる。

次には国頭に近い離島の伊平屋のシヌグについて『琉球國由来記』の記事を引用しよう。この由来

記にはシヌグ折目の名称は多くでているが、具体的な記述は少ない。その中で伊平屋の場合は相当に詳しく記してある。

「シノゴオリメノ事。(七月、島中ニテ日撰仕申。遊一日ノ事)。右、アクマハライトテ、男童十人程、アマミ人壹人、衣桐袴着テ、白サジ、シレタレ結びシテ、手々ニ、棒ツキ、アマミ人、並、其日ノ、年ナフリノ人、弓矢持、先立仕、

ナオヂヤライハウ、エイ、ヤイ、ハウ ト唱テ、家々ニ入り、又島ノニシ崎マデ行テ、ネヅミヲ取り、年ナフリ持タル、矢ノサキアテ、海ニ入レ捨テ、村ニ帰り、一所ニ寄合、神酒持寄、祝申也。」

アマミ人というのはアマミキヨのこと。沖縄、奄美の創世神で男神。その神になって行動する人が男童十人程を率いて出現するのである。年ナフリノ人とは、その人の生れ年の干支がその日の干支に適合した人で、選ばれて神事に加わる。創世神アマミキヨ(に扮した人)と男の子十人程と年回りのいい人々が弓矢や棒をもって家々を祓って悪魔を除き、田畑から鼠をとって海に流したのである。伊平屋の田名などでは現在もほぼこれと同様なシヌグを行なっている。

伊平屋ではシヌグ神としてアマミキヨが訪れるが、安田の場合も山から身に柴をまとって下る男たちを「アマン世の親たちの姿」であると言うから、この神々には遠い祖神という考えがあるのである。シヌグは七月の折目で、沖縄でも奄美でも七月は稲の収穫を終えた季節であるが、シヌグは収穫祭ではなくて、人々や家々、そして耕作地の災厄を柴枝や棒や弓をもって打ち祓って回ることを目的

としている。しかし安田の例にみるように柴をふるって女子たちを叩くことには人の罪穢れや疫病を打ち祓うのだという説明だけでは尽せない、悪神的な叩いて威嚇するという意味もあると見なければなるまいと思う。この柴をまとった神々はみな年齢階梯的な男子の集団であり、山から下ってくる事もシヌグの特徴となっている。

⑤ 赤マター・黒マター神事

これは集落の豊年祭にアカマター・クロマターという着面草装の神が来訪する神事で、八重山の西表島の古見岳の麓の古見に始まって小浜島へ、石垣島の宮良へ、新城島へも伝え行なわれている。古見の例を喜舎場永珣氏『八重山民俗誌上巻』⁽³⁾によりながら概要を述べておく。

古見では毎年、旧暦六月の壬の日から三日間プーリイ（豊年祭）が行なわれる。稲の収穫が終って集落をあげての収穫祭である。その初日はオンプール（御嶽豊年祭）である。古見には集落の中に六つのオン（御嶽）があり、集落の家々はどのオンに属するかが決まっており、祭りも六つのオンに分れて、それぞれの司という女神人を中心に氏子であるヤマニンジュ（山人数）が集まって行なう。過去一年間の祭りで願った事どもが聞きとどけられたことを感謝するウガンブドゥチ（願解き）が行なわれ、新しく醸したミシヤクが捧げられる。

第二日は来る年の豊年を願う日で、その豊作の願いをききとどけ予祝するために赤マター、黒マター、白マターの神々が来訪する神事がある。先の六つの御嶽にそれぞれ司やヤマニンジュが所属するよう

に、それぞれの来訪神も六つの御嶽に属する形をとる。すなわち南の村にある兼真御嶽くんしんには黒マターの親神、三離御嶽みちやうには黒マターの子神が属する。北の村の平西御嶽ひにしには赤マターの親神、慶田城御嶽には赤マターの子神、請原御嶽うきはらには白マターの親神、宇根御嶽には白マターの子神が属する。それぞれの親神と子神は伴って行動するので、その二つの御嶽のヤマニンジュがその神を迎え、祭り、送る形となる。

二日目には先ず、それぞれの御嶽の前の浜で舟漕ぎをする。古くは爬龍競漕が行なわれたという。そして日が西の海に沈もうとする頃に神々が出現する。黒マターは親子共に黒い面を被り、親神の面はものすごい形相のものが、子神の面は笑顔でやさしい。頭や体はサラムシロ（和名オオタニワタリ、羊歯の一種）で被われ、棒杖を持つ。この二神は南村の前良川に添うて下って川を渡って出現する。一方、赤マターは親神、子神共に赤い面を被り、頭にススキ、体にはシイテイ蔓（タイワンカンクサ）をまとう。白マターは共に白色の面を被る。親神の面は獰猛な形相であり子神の方は笑顔である点はみな同じ。扮装の植物も赤マターと同じで、この四神は北の村の後良川を上流から下って出現する。これらの神々の先導にはマイダツがそれぞれの色の旗をかざして進み、太鼓、鉦打ちに続いて神々が進み、ヤマニンジュの人々が進み、それぞれの御嶽集團のヤームトゥ（宗家）を訪れる。ヤームトゥにはその主人、司をはじめ村人が集まって神々を迎える。神出現を告げる警戒と威嚇の叫びとともに全身を揺り動かしながら二神は姿を現わし、ヤームトゥの主人の「赤マター、サレー」の挨拶

で司や村人の礼拝を受ける。神々はこうして宗家と御嶽を巡回した後で再び集落を去っていく。集落の通りなどで神と行き会うことなどは厳しく禁じられ、神の持つ棒杖に触れると死ぬと怖れられている。赤マター、白マター四神の帰り去る様子は、後良川の橋の袂まで村人は見送り、ギイラムヌという選ばれた青年たちが同伴して、さらに山道を進み、神々は松明の明りの中で村人の方を振り返り、村人は頭を垂れ泣きながら送る。ギイラムヌの別離の歌の中を神々はテイト山という山奥に姿を消していく。

プーリイの三日目には、ウイタビヌニンガイ（初旅人の願い）といって、十八歳になった男子青年が一人前の男としてヤマニンジュに加入する儀式が各本家で行なわれる。

以上の赤マターなどの神々はしばしば海のニライ・カナイから豊年を予祝するために来訪すると説明されるけれども、その去来する様子を詳しくみれば、山から川筋をたどって現われ、川筋にそって山奥に帰るといのが事実で、これが西表島の山地からの来訪神であることは確かである。面の相貌も行動もまことに怖ろしい神なのである。

⑥奄美大島秋名のシヨチュガマ

秋名は奄美大島北部の竜郷町の広い水田をもつ集落で、奄美の正月と言われる旧暦八月の初丙の日のアラセツ（新節）に山腹に小屋をたてて稲魂を招く行事をする。これをシヨチュガマという。山地で行ない、男の子供たちによる行事であった点が注目される。

シヨチュガマはこの行事に建てる小屋の名でもあって、アラセツの前に作られる。材料集めは十五歳以下の子供組は集まって協議して分担をきめる。二本の本柱とその上にのせるケタは特に重要なので柱セド、ケタセドは十五歳から選ばれ、父兄が手助けをする。今は集落の男子全員で一日で材料集めをしている。小屋は秋名田袋を眼下に見渡せる山の中腹の、シヨチュガマ屋敷に作る。前面に掘立柱を二本立て、ワラ葺きの片ひら屋根の十畳敷ほどのもの。二本柱は割り竹とボウ（和名ダンチク）の枝を付けて大きな稲穂状に作る。

アラセツの未明に集落の青年、壮年、子供など男たちはシヨチュガマの屋根に上り、鼓を打ち八月踊り歌をうたう。歌にさそわれて人々が集まってくる。女は山下の道から遠く見物して、シヨチュガマの屋根に上ることはない。夜が明けはじめ屋根の上に人が一杯になるころグジという小集落ごとの男性神人が二人、白衣に紋付羽織をつけて屋根の両端に立って、奄美中の稲魂様が秋名田袋に集まって稲を豊作にして下さるように唱え言をする。田袋の向うの山に太陽が昇り始めるとシヨチュガマの屋根に上った百人ほどの人数は歌に合せて、屋根を右に左に揺りはじめる。足と膝に力をこめて右に左に揺って終に揺り例してしまう。このシヨチュガマを揺り倒すのは小屋の両端の稲穂の作り物がよく実って畔を枕に倒れる様を表わすのだろうと言う。シヨチュガマが倒れると、そのワラ屋根の上で男たちによって八月踊りが踊られる。またこの一年の間に生れた男の子を親が抱いてきてシヨチュガマを踏ませて祝う。なお秋名ではこの日の夕方には女神人たちによって海辺の岩の上で同様に稲魂を

招く「平瀬マンカイ」が行なわれるが、これについては後節で記すことにする。

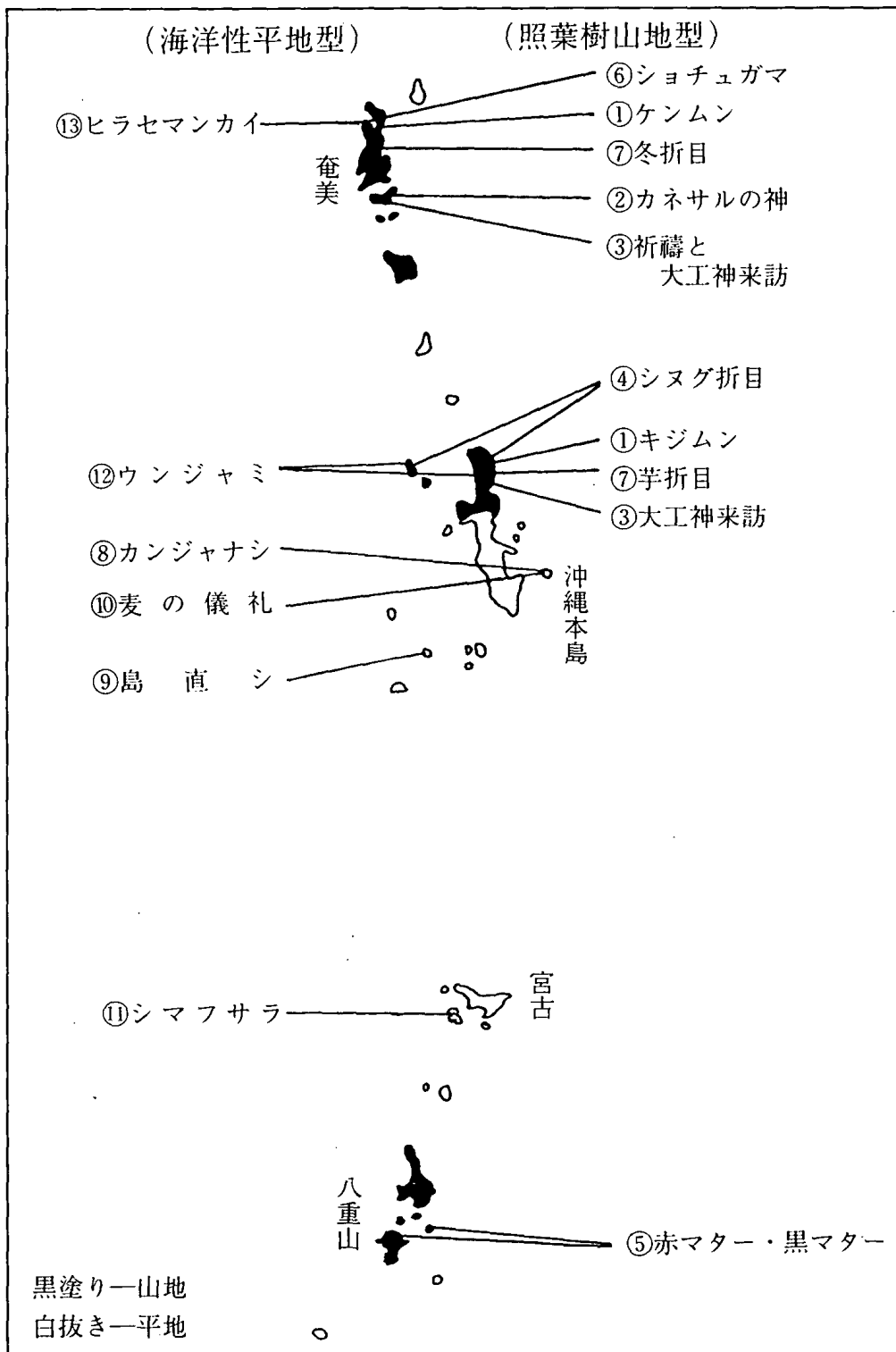
⑦冬折目と芋折目

フウンメ（冬折目）というのは奄美大島のほぼ全域にみられるノロ祭祀組織による祭りで、多くは旧暦十一月の戌の日に行なわれ、里芋や山芋（コーシャという栽培山芋）の祭りといい家々から供出したこれらの芋を煮てノロなどに供えてトネヤでの祭りがある。この冬折目の盛んな大和村の諸集落では、家々でも山芋を煮て食べて祭るが、この冬折目の日は恐ろしい山の神、嶽の神が活動する日だと言い、山の神が鉦を鳴らして里に下ってくるという。人々は冬折目の日と、その翌日は恐れて山に行かない。

冬折目と同質の祭りが、沖縄本島北部の国頭地方に限ってみられる。『琉球国由来記』によると、その名は芋折目、オンナイ折目、芋祭り、野原祭りなどと呼ばれ、旧暦十一月にノロなど神人によって祭られる芋の祭りであるが、その芋は主に甘藷である点が、奄美大島の冬折目と異っている。

その概要

以上、照葉樹山地型の神・祭場・来訪神事などを①から⑦まで羅列的に述べてみた。ここでは南西諸島の奄美から八重山までの地図にこの七つの信仰神事を記入して示した。この地図で理解できるように、この七つの民俗はみな照葉樹山地の島（地図では黒く塗って示す、平地の島は白く抜いてある）に分布していることが、一目瞭然とするのである。つまりこれらは照葉樹山地型の民俗文化であると



言えるのだが、これらに共通する諸要素を抜き出しておこう。

1 聖地としての山

奄美大島には神の山と考えられている聖なる山がいろいろある。③の祈禱の時には神々はこの神山から下ってくることを説明した。その神山にはまず奄美大島全体だけでなく徳之島にも広く分布するモリヤマ(森山)がある。それに対してオボツヤマは奄美大島南部の瀬戸内町(加計呂麻島、請島、与路島を含む)、宇検村、大和村に限って密に分布しており、加計呂麻北部には集落ごとにオボツヤマがある。オガミヤマ(拝み山か)カミヤマ(神山)も奄美大島に広く分布している。これらの神山は集落の人からは神の存る聖地としての伝承は濃い、前記のカネサル神の来訪を除いてはノロ祭祀とは全く関わりのないものとなっている。このことはこれらの神山とノロ祭祀とが系統を異にした民俗文化であることを思わせる。

それに対して沖縄本島の神山に相当するものは御嶽であろう。それは御嶽を森という例が『おもしろさうし』に多くあることから明らかである。国頭地方の御嶽は多く山上にある点で奄美大島の森山によく似ているが、沖縄本島中南部の御嶽はみな平地にあって山ではない。沖縄北部には山としての御嶽、中南部には名称だけで山でない御嶽があることになる。これは森山、御嶽文化が沖縄中南部では変質したことを示しているものと思われる。

2 山より下る恐ろしい神

③の奄美大島では祈禱の時に神山から神が下りて来て、その中に棒持ち神という人々を威す神がいる。④のシヌグには山から身に柴をまとい、柴枝をもって人々を打ち祓う神々が下ってくる。⑤の赤マター神事でも山から恐ろしい面相の草をまとった棒持ち神が下ってくる。このような実際の来訪神ではないが、②のカネサル神は山を下って人里に侵入すると恐れられ、それに対応するために人々は牛を殺してその肉を食べて身を固めるし、⑦の奄美大島大和村では里芋、山芋の収穫祭である冬折目にも山から恐ろしい神が下りてくるとされる。①のケンムン、キジムンも山中に棲む妖怪が人里近い照葉樹に住みついたものである。これら全例を通じて、神と妖怪、善神と悪神との区別の明らかでない恐れられる神が山から下ってくる。山を恐ろしい神の住む他界とする世界観は実に鮮明である。

3 男性年齢階梯集団による祭り

南島の祭りの多くが、ノロまたはツカサを中心とする女性祭祀集団によってとり行なわれているが、ここに挙げた祭りはそれと全く原理を異にしている。④のシヌグはウキーウイミ（男の祭り）と言われるようにこれに加わるのは国頭安田などの場合は祭祀集団の男子全員が山上で木の柴枝などで扮装して神となり、山を下って柴枝をふるって人々を打ち祓うし、伊平屋では十五歳以下の男の子供組が打ち祓う役を勤める。⑤の赤マター・黒マター神事もヤマニンジュという男性氏子集団によって行なわれ赤マター・黒マター神にも選ばれた若者が扮するし、祭りの最終日には十八歳の成年儀礼がある。

⑥のショチュガマは十五歳以下の男の子が主役で、女性は遠くから見物するだけである。そしてこれらは照葉樹山地で行なわれる祭りばかりである。

4 山樵・焼畑そして稲作

③の山から訪れてくる神の中にジョウギモチカンサーがいて、完成直前の祭屋や村有船などにびしびし定規を当てるなどして検査するのは誠に興味深い。山中に住む大工神が里人の技術を指導しているのである。照葉樹の山地をたどって山民としての山樵者が交流していたことの民俗的表現であろうと思う。⑦の山地に特有の冬折目や芋折目は冬の収穫祭であるが、里芋、山芋、甘藷の祭りとされている。しかしそのとき奄美大島大和村では山の神の活動が盛んで、人里にも下りてくると恐れられている。これも山地農耕、焼畑農耕の祭りに山の神が来り臨むと見ることもできよう。

⑤の赤マター・黒マターはプリーという稲・粟の収穫祭に出現して豊年を祝福し、来年の豊作を予祝すると言われる。これは迎える人々の歌詞に表現されていることで、赤マター、黒マターは無言で現われ無言で去って行くだけである。このプリーには稲作への転換、移行があったことも考えられる。⑥の奄美大島秋名のショチュガマは山上での稲魂を招く祭りで明らかに稲作の祭りだが、①から⑦までの中で、この⑥だけが恐れられる山の神が出現しない。恐ろしい山の神が消えて稲作の祭りができたのであろう。いずれにせよ、これらの地域に稲作への方向付けがあったことを見てとることができる。

以上、照葉樹山地型の神・祭場・来訪神事について述べ、概観したので次は海洋性平地型のものについて、同様に例をあげて概観することにしよう。

2 海洋性平地型

海洋性平地型の島にみられる神観念・祭事・神人などについて幾つかの事例を羅列的に挙げて、その特徴を考えてみよう。

⑧久高島のカンジャナシ

久高島は沖縄本島南部の東海にある麦作発祥伝説をもつ平地の島。旧暦四月、九月の壬の日からはじまるニラー・ハナーの神来訪の神事をカンジャナシ（神々さま）という。昭和六一年に見学したが、ここには一〇年程遡った形に戻して略記しておく。祭りは四日間行なわれ、久高、外間両ノロを中心に島の三十歳以上、七十歳までの女子の年齢階梯集団であるタマガエーという神女たちで進められる。第一日は供物の米を集め、第二日は供物のピザイサンニという握り飯を用意する。午後にはノロなど神女は島の中央にあるクボー御嶽に行き、ここで東方海上のニラー・ハナーにお通しして、明日の神の来訪を願う。

第三日目の早朝に美しい赤、青などの衣をつけた神々がニラー・ハナーからクボー御嶽に来臨される。この神々になる神女はきまった家系の中から選ばれて、何神になるかも決っている。この神女をウムリンガーというのは神となってその神のウムイという神歌を歌うからである。その神女たちがク

ボー御嶽に集まって、赤、青などの衣をつけて、ニラー・ハナーから来た神々となる。そして未明にクボー御嶽を出発して村に向う。ホーイホーと神の声を発しながら群行する。この神の声の近づくのを聞くと人々は心から畏怖したという。この神々を迎えて外間拝殿の庭で祭りがる。来訪したハンジャンシーたちは円く並び、その中央に神々の中の主位にあるアガリウプヌシ（東方大主）が立ってテイルルという神歌をうたう。外間、久高両ノ口は拝殿の中、タマガエは神々の外を囲んで竝ぶ。

アガリウプヌシが「アマミヤーよ、棒杖をもって島を直し、港を直せよ」という意味のテイルルを歌うと、アマミヤー（沖縄の創世神アマミキヨに相当。ニラー・ハナーから来訪した神でないので拝殿にいる）は朱の棒をもって神々の回りをそのテイルルを復唱しながら回って島を創りだした様を行なう。次にアガリウプヌシはヒチョージャという雷神に「薙刀をもって島の守りをせよ」と歌うと、来訪神の一人であるヒチョージャは刀とススキをもって祭場を回って島を守る様をする。アガリウプヌシはさらに大漁を願い、海上の安全を祈る長いテイルルを歌う。

この神遊びの神事が終るとアマミヤー、ヒチョージャー・アガリウプヌシの順に来訪神が続き、タマガエー達を従えて、集落を祓い、祝福して回る。途中、大浜では海に向いて男たちの航海を祝福するテイルルを歌う。

第四日目はムリバー（ムドゥリバーリ、戻り爬竜の意）で神々がニラー・ハナーに戻るのを送る行事。三日目と同様の神遊びが繰り返された後に、来訪した神々はアガリウプヌシを先頭に東方に向か

って並び、一本の竹竿を爬竜船のつもりで持つ。テイルルに合せて船の難行する様、ゆれる様が演じられ、ニラー・ハナーに着船する様も演じられて終る。

一度見学した位では理解は難かしく報告書を読んだが、その中では『沖縄県久高島の祭り』⁽⁴⁾（古典と民俗学叢書）の畠山篤氏の報告は最も精緻であった。

この祭りで注目されるのはニラー・ハナー（ニライ・カナイ）からの主神アガリウブヌシが創世神アマミヤー（アマミキヨ）を走狗のように使う場面である。またノロとタマガエーなどの女性祭祀集団とは別に、来訪神やアマミヤーなどになる（演ずる）ために別系の巫者的な祭祀集団が確立していることも興味深い。

⑨ 渡名喜島の「島直シ」

渡名喜島は那覇市の西海上にあり久米島と慶良間諸島との間にある一島一村の小島である。旧暦四月にシマノーシという祭りがあり、『琉球國由来記』には「島中の作物ノ為、又魚取、旅ノ往来ノ為」の祭りと説明してある。島の女神人はノロ一人、ウブチミチャン（オボツの神）二人ほど、これらを島神という。ギレーミチャン（ニライ・カナイの神）六人ほど、これを旅神という。集落は現在引続いているが、古くは四地区に分れていたと思われ、それぞれ一つずつの御嶽と殿とを持っている。この御嶽はだいぶ山の性格が強い。殿は庭という広場と火の神を祀る拝所からできている。祭りは四つの殿を回って行い、ノロなど女神人がみな参加するが、その殿の地区出身の神人が中心になって祭

る。島直シは旧暦四月末の五日間ほど殿を順に回って行なわれる。

祭りの二日ほど前から諸準備をするが、その一つにギレーミチャンが祭りのとき被るミチャブイというサンキライの葉つきの蔓で作る冠をその神女の数だけ作って神事のある所の岩の下に隠しておく。祭りの初日にはノロたち女神人は海のみえるアーカルに神迎えに行く。神迎えとは旅神であるギレーミチャンをギレー（ニライ）の海から迎えることで、ギレーミチャンが先のサンキライのミチャブイをとって頭に被ることでギレーからの来訪神となるのである。島神であるノロやオボツミチャンはミチャブイは被らない。

四つの殿での祭りは簡単で、その殿の地区の人々が参列し、その地区出身の女神人が拝所の前で祈願し、他の女神人は列席する。供物の直会があつて終る。その後、里地区とクビリ地区の場合は神人は山の頂に近い里のアシビナー（遊び庭）で太鼓をたたき、ウムイを歌って遊ぶ。それに対してニシバラ地区とウイグニ地区の場合は殿の祭りの後で殿の前庭でアラシトイ（嵐風）という遊びがある。二本の竹竿を船に見たてて並べ、その中にギレーミチャンが全員入って「アラシトイ」と唱えて竹竿を叩いて通る。ノロやオボツミチャンは竹竿の外にいる。これは船の安全を祈る行事である。また、この二地区のアシビナーはヘーバラカニクという浜辺で、ここで神遊びが行なわれる。

最後の五日目にはギレーの神を送る。東の海を見下す定まった岡で、ギレーミチャンは緑のミチャブイを脱ぎ、ギレーに帰ったことになり、ノロなど神人は皆、ウムイを歌い扇を振ってそれを送るの

である。このようにしてギレー（ニライ）から来訪した神は祭りに加わり、アラシトーイの遊びをして航海の安全を祈る神事をして、送られて帰って行くのである。（主に『地域文化研究（甲南大学地域文化研究会）第四号』の「沖縄の祭祀」による）

⑩久高島の麦の儀礼

久高島は麦作発祥の創世神話があり、また旧暦二月の麦穂祭りに琉球国王が自ら来り加わった歴史がある。この島の麦作儀礼を略記してみよう。

ハチダネ（初種、ファッテラミともいう）旧暦九月上旬の戌の日の行事。外間ノロ家、久高ノロ家、外間ニツチュ家、久高ニツチュ家はそれぞれノロ地、ニツチュ地という畑をもっている。この日の朝に巳年の人を選んで、それぞれの地の畑を一メートル四方ほど耕やして麦の種を儀礼的にまく。久高島の伊敷浜に麦穂などの入った瓢箪が漂着し、その麦穂を最初にまいたと伝える畑をハタスとい、この畑は大里家が管理しており、石祠が祀られて拝所となっている。大里家もこのハタスでハチダネを行なって、この拝所で麦の豊作を祈願する。また集落の家々でもこの日に自分の耕作地でそれぞれハチダネをするものだったという。実際の麦の播種は、このハチダネの後の適当な日を選んで、ふつうは雨の降るのを待って行なっている。麦のハチダネという播種儀礼が集落の祭祀でなく、みな家々の祭りである点は古い姿を止めているのだろう。

マブッチマッテイ（マブッチを供える祭り、麦の初穂祭り）は旧暦一月中旬のミンニー（壬の日）

にノ口の祭祀集団によって二日間行なわれる。第一日の朝、外間ノ口（久高ノ口は病氣）はウンサクという神女役をつれてクボー御嶽に参り、神々を招待し、祭に使うアデカ（和名アデク、葉の大きい樹）の枝を採り、帰りにヤグルガーという噴井で禊ぎをし白衣に着替え、ウンサクは泉の水を汲んで帰る。外間拝殿の庭で朝マッテイ（朝祭り）がある。女神人の年長者のタムトウたちは白衣にトウヅルモドキのハブイ（冠蔓）をつけてタムト庭に着座している。集落には門中に相当する集団が十一あり、それぞれマブッチの高膳を一つずつ出すが、外間拝殿の庭にはそのうちの七つが並べてある。各の高膳にはマブッチ（麦の粉で作ったかための粥、祭りの名もこれに由来している）を入れた容器、若い麦の穂三本、水の容器のひさご、アマミダーク（和名ダンチク）の葉に鉄釘をつけた矢一本、の四品がのせてある。この七膳の上をノ口は御嶽からとってきたアデカの葉で四度回して祓う。ウンサクはヤグルガーで汲んできた水を容器に入れ、麦の穂をとってその水に浸して清める。その水をマブッチの上にもふりかける。これは麦の初穂を聖水ですすぎ、魔を矢で追いはらって、祀ることであろう。同様なことを久高殿で久高側の四膳についても行なう。タマッテイ（夕祭り）には集落の畑の組（畑を共有し、割り替えて耕作する組で十組ある）から供出したタルマーミキというミキで祭りをする。翌日の朝マッテイもミキの祭り、これで麦の初穂祭りは終る。

この日、集落の家々でも家の初穂祭りを続けているところがある。内間順一家ではこの日にターチメーという麦粉を炊いて黒糖を加えて丸いオニギリにしたものを作る。畑から麦の初穂を三本とって

帰り、ミガー（新井川）の泉からも水を汲んでくる。盆に麦の穂、泉の水、ターチャーメーをのせ、戸主がそれをもつて庭から家のトッバシラという神を拝み、穂の麦粒を三粒とって水の椀に入れる。その後この水と麦粒とを屋根の上に投げ上げる。これも麦の初穂を清めて祭るのである。

三月マッテイ（三月祭り、麦の収穫祭）は旧暦三月の中旬のミンニー（壬の日）にノロの祭祀集団によって二日間行なわれる。第一日の朝マッテイは外間拝殿ではじまる。タムトウたちは頭にハブイを被ってタムト庭に着座している。集落の各の畑の組から今年の新しい麦を粒のまま煮たジーンバイ（麦飯）が供えられる。竹籠の中に麦飯を入れ、その上にユーナ（和名オオハマボウ）の葉数枚を被せて五本、七本などの竹串をさして止め、その上に食塩の入った小皿をのせる。この竹籠をのせた高膳を集めた前に外間ノロはハブイを被って立ち、手に開いたイチャティオーギ（祭祀用の大きな扇、太陽と鳳凰を描いてある）をもってジーンバイの上をおおいで祝福する。続いてこのジーンバイの直会があり、次に久高殿に移動して久高側のジーンバイについても同様にする。この後、ノロたち神女はクボー御嶽に行き、ウユーという麦粉で作った粥と、ウンバイという麦をいって粉にしたものに黒糖を加えた餅状の食物などの新麦の食物を御嶽のイビの前に供え、また共食する。

第一日のタマッテイ、第二日の朝マッテイには麦粉で作ったミキが供えられ祭られ共食される。三月祭りはこのようにして新しく収穫した麦でいろいろの食物を作り、それを祝福して神にも供え、人々も食べる新嘗の祭りである。

⑪宮古・伊良部島佐良浜のシマフサラ

旧暦十一月にシマフサラまたはカエルガマという行事がある。海上遭難者の漂着とそれに伴う疫病の流行を防止するための行事とされている。司など神女たちは浜カズラ（和名ハマヒルガオ）を被り、手には魔除けの棒と手草をもって「ヤマグイダシバ（悪い物を出しなさい）」と口々に呼び、家々の戸をたたいて回り、マジムンを追い出し、集落のはずれまで追い払い、カズラや手草といっしょにヤマグ（悪い者）を海に落す。（『沖縄民俗』⁶第十九号による）

この佐良浜で私も話を聞いたが、ユークインマ（五〇歳から五五歳までの女で、神女集団を作り、ツカサもこの中から選ばれる）が深夜の村の中を異様な姿をして走り回り、家々の戸を叩いて「ヤマグイダシバ」と大声で叫ぶのを聞くと、そのユークイマ自身が海から上がってきたヤマグその者のように思えて、身がすくむような恐怖を感じるものだったという。

⑫比地のウンジャミ

これからの二事例⑫⑬は海洋性平地の地域のものでなく、照葉樹山地での祭事であるが、後に論ずるように海洋性平地型の文化が照葉樹山地に伝えられて、その山の文化と対応する平地文化を作ったと思われるものである。その内、先ず④のシヌグに対するウンジャミから。

ウンジャミはシヌグの分布地域で、同じく旧暦七月の中旬に行なわれている。沖縄本島国頭の東海岸の安田、安波、奥などはすべてシヌグとウンジャミを隔年交互に行なう。同じく西海岸では川田、

比地などウンジャミだけを行なう。本部半島にはシヌグのみ行なう集落とウンジャミのみ行なう勢理客、運天などがみられ、伊平屋、伊是名島ではシヌグとウンジャミを毎年重複して行なっている。ここには私も見学した国頭西海岸の比地のウンジャミを略記しておく。

比地のウンジャミ（海神折目）は比地、奥間を中心に鏡地、桃原などが集まって、旧暦七月の盆後の亥の日に行なう。比地のカミアシャギは小玉森にあり、その前に広いアシャギマー（アシャギの庭）があつて祭りが行なわれる。奥間ノロをはじめ各集落の根神など女神人が石柱、カヤ茸のアシャギに集まって、神衣装をつけ頭にはツルマキカズラ（和名カニクサ）にデーク（和名ダンチク）の冠を被った正装をして居並ぶ。庭には高膳を並べてウンシャク（神酒）、蜜柑、カーサ餅、フナ、豚肉などの供え物が並んでいる。集落代表の根人（男）たちが女神人に米などと酒を捧げて拝む。

アシャギの庭で神遊びがはじまる。遊び神という女神人は山の神と海の神（ウシユヌカン、潮の神）とに分れ、山の神はツルマキカズラとデークを被り、海の神はスゲの葉をゆでて漂白したものを海藻のようにして被る。

先ず白衣の神女数人が、輪を描いて、太鼓とクエーナの歌に合わせて簡単な踊りをする。クエーナは「船を作り、大和にガール玉を買いに船旅をしたが、海が荒れて玉が潮にぬれた」という航海の歌である。次は派手な模様衣装をつけた山の神、海の神がでて、テル（大きな竹籠）を猪にみたてて射る狂言的な遊びをする。次は男二人がワラ縄二本で船の形を作り、男二人は前と後で船頭をつとめ、神

女たちをその中に乗せて航海する様をする。船がゆれ神女たちは船端をもつてゆれる。歌われるクエーナは、比地から奥間へ神女たちを急いで送る内容かと思われる。これで神遊びは終り、神女たちは奥間のノロドンチへ移動する。ここでも根人たちが神女に捧げものをしてまつり、簡単な神遊びがある。女神人たちはそのままの姿で鏡地の海岸にでる。女神人たちは草の冠を脱いでアダンの樹陰に掛け、比地、奥間の祭場から持ってきたパパイアの実に閉じこめた鼠を浜砂に埋めて流す。遊び神はクエーナを歌って終る。

ウンジャミはシヌグの分布圏に肩を並べるようにしてあり、シヌグは山の祭り、男の祭り、ウンジャミは名のように海の祭り、女の祭りと対比、対立している。その考察は後に述べることにする。

⑬秋名のヒラセマンカイ

先に⑥に記した奄美大島秋名のショチュガマに対するのがヒラセマンカイである。旧暦八月の新節の日の朝、山腹のショチュガマという小屋に男たちが上って揺り倒す祭りがあり、その夕方に今度は海辺の巨石の上で女たちによるヒラセマンカイが行なわれる。

ヒラセマンカイは「海岩の上の招き合い」といった意味で新節の夕方から行なわれる。秋名集落の湾に沿う村から少し離れた海辺の干潮線に二つの大岩が一〇メートルほど離れて向い合っている。これを神平瀬、女童平瀬といって、神事はこの神平瀬の上にノロなど神女が数人神衣をつけて上り、女童平瀬に現在はグジという男神人と平服の女神人数人（古くは女童という神女になる前の娘が上るも

のだった)が上り、これが向い合ってマンカイをする。一方が稲魂を招くための神歌を歌うと一方はそれに合せて招きの手振りをし、それがまた入れ代って続く。海に向うから稲魂を招く儀礼である。これが終って神女たちは岩から下り、集落の人々と八月踊りをする。秋名でこの一年の間に生れた女の子を親が抱いてきてカシキ(赤飯)を供えて、神ヒラセの上に立たせ踏ませて祝う。

シヨチュガマは元は秋名以外にも竜郷村や名瀬市の一〇集落ほどこで行なわれたことが知られているが、ヒラセマンカイは秋名の外には隣りの嘉渡で行なわれているだけである。シヨチュガマは山の祭り、男の祭り、ヒラセマンカイは海の祭り、女の祭りと対比、対立しているが始めから両立していたのではなく、ヒラセマンカイが後に加わったとも考えられる。その考察も後に述べることにする。

その概要

以上、海洋性平地型の文化の神・祭場・来訪神事などを⑧から⑬まで述べてみた。⑫⑬については実は照葉樹山地のものであるが、これは海洋性平地の文化が照葉樹山地に伝播し、その地の山地型の祭事に対立する海洋性平地型の祭事として付け加わったものと思われ、極めて興味深くまた重要な事例と思われるので、さらに後節で考えたい。ここで海洋性平地型の事例に共通する諸要素を抜き出してみよう。照葉樹山地型の諸要素と対比してみられたい。

1 海上の理想郷

平地型の地域には海の彼方を理想郷とする祭りが多い。⑨の渡名喜島の島直シの祭りには海の彼方

ギレー・カネー（ニライ・カナイ）から神が来訪する。このギレーの神となって行動する神女はギレーミチャンと呼ばれていて、ギレー神を招く場にこの神女がサンキライのハブイを被って現われるとギレー神の来訪となって神事が行なわれる。⑧の久高島のカンジャンシ神事の場合も海上のニラー・ハナー（ニライ・カナイ）から来訪する神々になる神女は決っていて、その神女がクボー御嶽で赤、青などの神衣をつけるとニラー・ハナーからの来訪神となる。

久高島の場合ニラーからの来訪神の中の最高神はアガリウプヌシ（東方の大王）とされるのは興味深い。ニラーからの主神は当然ニレーウプヌシであるはずだし、事実ニレーウプヌシという神女はいたというがシジ高いため（位が高すぎるので）来訪神事に加わらず拝殿に座っていたという。私はこれを久高島（沖縄全体でも）の理想郷観がニライ・カナイ（海彼の国）からアガリ・テダガアナ（東方の海彼の国）へと転換したことを示すものと考ええる。だからニレーウプヌシは出端を失ない、アガリウプヌシが主神となって来訪神やアマミヤー（アマミキヨ）までも指揮し、村の生活では両ノ口についてエラゴウナギの広い漁獲権を得ているのだろう。このような海上理想郷の変遷する姿をみればニライ・カナイ観もさほど古くない思想ではと疑ってみたくなる。

⑫の比地のウンジャミの神遊びには山の神と海の神が異なった冠をつけて数人ずつで歌い遊ぶ。この海の神はウシユンカン（潮の神）と呼ばれている。この呼び名は海観の古い形をよく示していると思われる。

2 開明的な海の来訪神

山からの来訪神が棒を持った恐ろしい姿をして村の人々を打ち祓ったり、家々に入って柴で叩いたりして、悪神とも善神とも知れない行動をとる例が多いのに対して、海から訪れる神々は、その扮装にしても行動にしても神遊びと言うにふさわしい。⑧の久高島のカンジャナシではアマミキヨの島草創の様が演ぜられるし、⑫の比地のウンジャミでは竹籠の大きいのを猪にして射てとる狩予祝の演劇も行なわれる。⑧でも⑨でも⑫でも言い合せたように竹竿や縄の船に乗って荒れる海を無事航行する様が演技される。⑬のヒラセマンカイには歌と招き合いの芸能がある。これらは神来訪という原始的で不合理な神事を演劇化、芸能化することによって合理化し理解し易くしたのであり、神来訪の開明化である。④のシヌグと⑫のウンジャミ、⑥のショチュガマと⑬のヒラセマンカイを比べればそのことは歴然とするのである。古いものと新しいものの相違とも言えよう。

しかし、⑪の宮古のシマフサラでは明らかに海から来るものが恐れられているし、それを祓うユークインマという神女がその海の魔のように意識されていて、ここには山の神、②のカネサル神にも似ているのが注目されよう。

3 女性神役組織による祭り

照葉樹山地型の祭りが男性年齢階梯集団により行なわれるのに対して、海洋性平地型の祭りは女性神役組織によって行なわれる。⑧⑩の久高島は中でも複雑な神女組織を持っている。外間・久高両ノ

口を最高位にしてニীগンなど国神とよばれる神女の下に、島の全女子の内四一歳から七〇歳までは年齢によってタムトウ、ウンサク、ヤジクなどの神女集団を作る。例えば⑩の麦の祭りなどを行なうのはこの神女組織である。これとは別に⑧のカンジャナシの祭り、アガリウプヌシやアマミヤーやヒチョーザーのように来訪神となり神遊びを行なったりする特別の職能の神女（男性もいる）の組織もあってこれをムトウガミ、ウムリングアといって一般の祭りには陪席するだけである。この二つの神女組織は出自と系譜を異にされると思われる。家々のオナリ神を組織化して成立したと思われるノ口神女組織と、それに来訪神となり神遊びをするための巫性の強い神女組織が後にできて加わったものかと思われる。このようにして神女組織は複雑な発展をとげた。

4 航海と麦作

渡名喜島の島直シ⑨ではグレーミチャンというニライの神女は二本の竹竿を船にみたてて、その船端を叩いて「嵐トーイ（嵐よ凪げ）」と唱え、これが島直シ儀礼の重要な要素となっている。⑧の久高島のカンジャナシにも⑫の比地のウンジャミにも同様に竹や縄の船に乗っての神女たちの神遊びがあるのは同様な航海の安全を祈り祝う儀礼である。

久高島は麦作発生の説話をもつだけに麦作の儀礼は播種・初穂・収穫がそれぞれ大きな祭りになっていることは⑩に見られる。集落のノ口神女集団による祭りだけでなく、家々でもまた詳しい祭りを行なっている。

久高島に限らず沖縄本島の中南部の平地型の地域には麦の儀礼が多い。『琉球國由来記』の各地の年中祭祀の項を分布地図化してみると、北部の国頭地方には先に記したような旧暦十一月の芋折目、芋祭りが特徴的に分布しているのに対して、中南部地方には旧暦九月に「麦初種子・ミヤダネ」を行なうという記事が多いことが特徴となっている。麦初種子は久高島でみたように畑をごくすこし耕やして儀礼的に麦種子をまくことである。この播種儀礼が古く重要であったことを示している。ミヤダネは庭種子のことで、この麦初種子の日に家の庭を少し耕やして稲をはじめ大根などの種子を少しずつまくことである。この二つが伴ったことは麦の耕作にならって稲を作ったこと、作物の中で麦が主導的な役をしていたことを示すものと思われる。

二、生活文化としての人体運搬法

照葉樹山地と海洋性平地の島の神・祭場・来訪神について事例を挙げて、その特徴と対比を見てきた。次には日常生活の文化を比較する意味で、これらの島々の人体による運搬法をとり上げて比較してみたい。

1 照葉樹山地型

人体による運搬法を山地型の島・地方について北から南へ順に概観し、さらに要点も続いて述べることにする。「南西諸島の人体による運搬表」を参照されたい。

南西諸島人体による運搬表

	載 せ 運 搬		掛 け 負 い 運 搬	
			頭掛け負い	肩掛け負い
	頭上運搬	担ぎ運搬	縄 籠	縄 籠 梯子
種子島	○女男	○男		○ ○ ○
屋久島	×	×		○ ○ ○
三十島	○女	×		×
	○女	○男		○ ○ ○
奄美大島	○女	○男	○女 ○女男	
喜界島	○女	○男	○女 ○女男	
徳之島	○女	○男女	○女 ○女男	
沖永良部島	○女男	○男		
与論島	○女	○男		
沖縄本島北部	×	○男	○女 ○女	
沖縄本島南部	○女	○男		
宮古諸島	○女	○男		
八重山諸島	○女	○男		

a 奄美大島

奄美大島（加計呂麻島・請島・与路島を含めて）の人体による運搬法で最も盛んなのはテイルという深い竹籠にテイルノオ（竹籠の緒）をつけ、その中央の幅広い部分を頭（前頭部）にかけて背に負う方法である。これをカツケリ（掛けること）という。テイルノオはそれだけを用いて負うことができ、元はよく見るものだった。薪の束や稲束の後ろ下端でテイルノオを結んで、頭に掛けて負う。荷の束は縦に負うことになる。これもカツケリである。近來はこのテイルノオによる負い方に変化が起って、男は一般にテイルノオを額に掛けるのではなく両肩に下して掛けて負う。女も軽い荷のとき

はこのようにする者が多い。ティルノオの頭掛け運搬が変化しつつあるのだが、ランドセル状の竹籠
負いや、負い梯子は全くみることはできない。

奄美大島では頭上運搬のことをカメラリといって、遠い運搬にはみられないが、集落内での野菜を入
れた平籠などをカメラリで運ぶのは女の運搬法としてしばしば行なわれている。台輪は手拭を巻いて使
う。それに対して男の運搬法としてオークという両端の尖った棒で、稲・麦の束や薪の束を両端にさ
して担ぐ方法が行なわれている。これをカタメリ（肩にのせる）という。（恵原義盛さんより）

b 奄美・徳之島

ティルをティルノオを用いてマチ（額）に掛けて運ぶことをハンギリ（掛けること）というが、徳
之島では奄美大島とは違って女だけでなく男もティルノオを頭に掛けて運ぶのが普通で、今もなか
か盛んに行なわれている。ティルノオだけで負う運び方も行なわれて、これもハンギリという。負
い梯子は全くない。

女が頭にものをのせて運ぶことをカミリ、カメラリといい、水を入れた桶、イモを入れた籠などを運
ぶのを大正の頃まではよく見るものだったが、今はほとんど見なくなった。この時の台輪はカシユリ
という。荷を棒で担ぐことをカテリといい、担い棒はティギョという。天秤棒にあたるものをただティ
ギョといい、両端の尖った鹿兒島本土のオコにあたるものはイネカテティギョ（稲担ぎティギョ）と
いい稲束や薪などを運ぶ。ティギョ・イネカテティギョ共に男の運搬法であるが、戦後は女もこれを

用いて運ぶように変ってきた。(徳之島町亀津の徳富重成さん、その他より)

c 沖縄本島北部と伊平屋諸島

沖縄に関しては私の資料は概要をのべるには不充分なので、以下は沖縄県教育委員会文化課監修

『沖縄の民俗資料』⁽⁷⁾第一集と上江洲均氏『沖縄の暮らしと民具』⁽⁷⁾の中の「女性の二つの運搬用具」を参考にして記すことにする。

沖縄本島北部というのは本部半島のほぼ中央を横ぎって線をひいた北部で、本島の約三分の一ほどにあたり、山原とよばれて山地が多い。それに伊平屋諸島を加えた地域を考えてみる。ここでは女の運搬法としてはカサギ(頭負い運搬)が主なものとしてよく行なわれる。普通はティルとよばれる竹で編んだ深目の竹籠に四つの耳をつけて、カサギンナ、ハサギンナ(カサギ縄)を通し、それを頭(額部)にかけて背負う。ティルによるカサギを行なうだけでなく、カサギンナを直接に薪や稲や力やなどの束に横にまわして頭にかけて負うこともする。これは奄美の大島、徳之島、喜界島のティルとティルノオの使い方と全く同様である。ただ奄美では男もこれを使用する例が多いのに、この地方では男は使わないものらしい。男の運搬法はボウ(棒)、ニニャボウ(担ぎ棒)という天秤棒に相当する棒で、オーダ(もっこ)などを両端にかけて担ぐ。尖り棒があるか否か不明。山仕事で大きな木などを片方の肩に担ぐのをマンガタミーという。負い梯子はない。

女の運搬法としてのカンミ(頭上運搬)は原則的には行なわれない。

d 八重山諸島

八重山諸島は宮古諸島とはちがつて照葉樹山地の島であるが、運搬法はほとんど違いはない。すなわち、女の運搬法はカンミ（頭頂運搬）がよく行なわれる。台輪は西表島、与那国島、竹富島などではカブシ、ハブシというが、石垣島や波照間島ではシチキ、スシキという敷き系の名がある。男の運搬は棒の肩担ぎによる。担ぎ棒はアंक、アオ、アフなどオコ系の名を用い、天秤棒のことである。これは女は行なわない。宮古島と同様に頭かけ負い、両肩かけ負いの習慣はみられない。

2 海洋性平地型

これも北から南に概要を記すことにする。

e 喜界島・沖永良部島・与論島

喜界島では頭上運搬をハメリ、ハメユンといい、今でもしばしばみられ女だけが行なう。水を入れた桶を頭にのせて井戸から運ぶ姿が元はよくみられた。頭にのせる台輪はハブシといい、カヤ、ワラ製である。一方、テイル（負い籠）はみな自製で、草刈り用の大きいマンメーヒナイ（馬用テイル）とイモ運び用の小さいアッキービナイ（食事用テイル）とがある。負い方の男女の違いは奄美大島と変わらない。この頭にテイルノオを掛けて負うことをハマチヒッキン（頭に掛ける）という。テイルノオはイ（七島蘭）やハジ（オオハマボウの皮の繊維）を用いて作るが技術がいる。テイルノオだけで薪などを運ぶこともある。負い梯子は全く用いない。オコ（担ぎ棒）による運搬は男子の運搬法と

して盛んである。(阿伝の政井禎明さんより)

沖永良部島では頭上運搬をハミュンといい、台輪はハーブシと呼び、大正時代までは男もイモなどをヒャーギという竹籠に入れて運ぶものをよくみかけたが、今は女の頭上運搬を時に見かけるだけになった。担ぐことをハタミルといい、天秤棒にあたるものを鹿兒島本土と同じくサシといって、水の運搬だけでなくオーダ(縄籠)などにイモを入れて男が担ぐが、これは新しい運搬法のように思う。負う運搬は子供を負うぐらいのもので他にはなく、負い籠のテイルもなく、負い梯子もない。(和泊町和泊の永吉毅さんより)

与論島では頭上運搬をハーミンといって女の運搬法の代表的なものだが、現在は見るのが少なくなった。台輪はハブシといってワラ、カヤで作る。頭にのせるのはフイ(水桶)の水、ウウドウイ(大筵)のイモなど何でも運んだ。担ぐことをハタミといい、担ぎ棒をハタミボウといって農作物や海水を運ぶが、こちらは男の運搬法である。負う運搬法は子供を負うぐらいで、竹籠や負い梯子を頭にかけたり、両肩にかけて負って運ぶことは全くしない。(与論島の野口才蔵さん他より)

f 沖縄本島中南部と周辺離島

先にcで述べた沖縄本島北部と伊平屋諸島を除いた海洋性平地の地域である。この地域はcの運搬法とははっきりした相違を示している。この地域では女のカサギンナ(頭負い縄)による頭負い運搬が行なわれない。テイルという深い竹籠はあるが、それをカサギンナで頭にかけて負うことをせず、

またカサギンナだけでの頭負いもしない。男女ともしない。負い梯子もないから、負い運搬がないのである。そしてそのかわりに女のカンミ（頭上運搬）が盛んである。これをカンミューンといい、薪の束、バーキ（籠）に入れた農作物、タグ（桶）に入れた水などなんでも運ぶ。台輪は一般にガンシナというが、久米島や慶良間島では奄美に近いカブシ、カブシリとよぶ。男の運搬は北部沖縄と同様にボウ、ニニャボウによる肩担ぎを行なう。

9 宮古諸島

沖縄中南部に、またdの八重山諸島によく似ている。女の運搬法は頭上運搬が現在もさかんである。台輪はカウス、カブスで、水桶、マゴ、バーキなどをカミル。それに対して男の運搬法はオーク、アオコなどという両端の尖っていない担ぎ棒で前後に荷をつけ肩に担ぐ。それらに対して負う運搬法はなく、頭にかけたり、両肩にかけたりする負い方もない。負い籠、負い梯子もない。

人体運搬法の概要

次に人体運搬を分類してみよう。

載せ運搬

1 頭上運搬―輪台を使って頭に載せて運ぶ。

2 肩担ぎ運搬―担ぎ棒を使って肩に載せて運ぶ。

負い運搬

3 頭かけ運搬―負い縄だけで負う場合と、負い縄に籠をつけて負う場合がある。

4 肩かけ運搬―負い縄だけで負う場合と、負い縄に籠をつけて負う場合と、負い縄に負い梯子をつけて負う場合とがある。

奄美・沖縄ではこのうちの載せ運搬の1と2、負い運搬の3だけが行なわれ、負い運搬の4の肩かけ運搬は行なわれていない。(奄美の北に続く、三島村、十島村にはある。)

そして先の運搬表にみるように、南島にはほとんどの島にも載せ運搬の1頭上運搬と2肩担ぎ運搬があるが、沖縄本島北部と伊平屋諸島には頭上運搬はない。かつて点々とあったという伝承があるというから、ここにも頭上運搬があったのが後に消失したものと思われる。そうなれば奄美・沖縄には載せ運搬が全面的にあったと言える。

それに対して、負い運搬の3頭かけ運搬は照葉樹山地型の奄美大島・徳之島、それに沖縄北部、伊平屋諸島に分布していることがわかる。しかし照葉樹山地でも南の端の八重山諸島には全く分布しない。もう一つの例外として、最も北の喜界島は海洋性平地であるにも関わらず頭かけ運搬が分布している。

頭上運搬は荷を頭の上に載せるだけのいわば最も原初的な運搬法であるから、これが南島の島々に全島的に分布していることは理解できる。古くは男女共にこの運搬であったと思われるが、後に同じ載せ運搬である2の肩担ぎ運搬に男が変って頭上運搬は女だけとなったと思われる。

それに対して負い運搬は負い縄で荷を頭や肩に掛けて固定することができるから、山地の運搬に適しており、その内のより原形的な3の頭掛け運搬だけが、おそらく北方の日本本土の山地から、山地だけを選んで奄美大島、徳之島、沖縄本島北部に伝播し定着したと思われる。遠い先島の八重山島にはまだ伝播し得なかったものと思われる。これを追うようにして日本本土山地からは4の肩かけ運搬が伝播し南下したが、奄美には達しなかった。

このように考えれば南島の人体によく運搬の分布相を一応理解できる。負い運搬が照葉樹山地を選んで伝播定着するのは極めて生態的な文化現象と言えるのである。次にはこの運搬という文化と先にみた神事、来訪神事の分布相とを総合して考察してみたい。

三、生態史的展開

事例を挙げて南島の照葉樹山地型の文化と海洋性平地型の文化について説明した。もう一度それを抜き書きしておこう。

照葉樹山地の文化

1 聖地としての山

2 山より下る恐ろしい神

3 男性年齢階梯集団による祭り

4 山樵・焼畑そして稲作

5 頭かけ負い運搬

海洋性平地の文化

1 海上の理想郷

2 開明的な海の来訪神

3 女性神役組織による祭り

4 航海と麦作

5 頭上運搬と肩担ぎ運搬

このように山地の島と平地の島とが極端なまでに対立した文化を持つについては生態的な視点に立って史的な展開を考えるより方法はあるまい。私はその史的展開を巨視的にみて三段階あったと考えてみる。それを次に古いものから説明してみよう。

一、南島基層文化

これは極めて古くから南島の島々に広がっていた文化で、山地、平地の区別なく存在したと思われるが、島ばかりであるため海洋性平地的であるのは当然であろう。一時、盛んに唱えられたヤポネシアの文化もこの基層文化を言っているものと思う。

特徴としては集落が孤立していて、それを取り囲むのが荒い海や叢林または山地で、人々は自然の

脅威の中に暮していた。こうした人々は海や山には常に魔性の災厄神が住んでいて、海山に入りこむ人々に害を与えるばかりでなく、海山から人里へ災厄神が侵入する日もきまつているものと考えられた。その日には人々は家の中に閉じこもるだけでなく、対策をいろいろと講じただろうが、その中の強力な方法は牛（豚、鶏は代用）を育てておいて殺して、その肉を食べて身を堅固にするというものだった。②のカネサル神への対応がそうだし、⑪の伊良部島のシマフサラでもよく縄に牛の骨片を結びつけて集落入口に張る例をみることができる。供犠の基本的な型がこの基層文化の中にあつたと見られよう。

運搬法は単純で男女共に頭上運搬だけの生活であつたと思われるが、運搬量を増すためには荷物を頭から一方の肩へ移す肩上運搬を経て担ぎ棒による肩担ぎ運搬も男の間で行なわれたものと思う。

漁業中心の生活だつたと思われるから、漁をする男たちの海上の生活を守るためのオナリ神信仰も早く成立していたものと思われる。沖縄の古い抒情歌オモロの中に歌われている心情の柱になるものは、肉身のオナリ（姉妹）に対するエケリ（兄弟）の不思議なまでの渴仰であり、オナリのもつエケリ守護への使命感の強さである。そしてこのオナリ神信仰は基盤となつて、さらに大きく展開するのである。

二、山地性文化の南下

山地性の文化が南島へ九州山地から南下したと考える根拠を二つほど記しておこう。九州南部の年中行事や集落の祭りでは男の子供組と青年組が主役となって活動するものがほとんどだが、南島になると祭りはすべて女性神役によるもの、年中行事は家ごとの行事で男の子、男の青年の活動はほとんどない。そうした中で、④で記したシヌグ折目、⑤の八重山の赤マター・黒マター、⑥の奄美のシヨチュガマなどはいわば女を近づけない男の青年や子供たちだけのまつりである。そうした例は、もう幾つか拾いだせるが、それらはみな私の言う照葉樹山地の地域に限られて分布している。これはどうしても男の子供組、青年組による祭事を文化の型としてもつ九州南部から南島に文化が南下したのだと考えるのが適当であること。

さらに山地文化と思われる負い運搬の分布をみると、三島・十島までは肩かけの負い籠、負い梯子があるが、奄美に入るとそれが頭かけの負い縄、負い籠だけとなり、沖縄本島北部まで山地を選ぶように分布し、八重山には達していない。これは九州山地から負い運搬の次々と新しい形が南の島の山地を選んで伝わってきたこと、しかもまだ八重山諸島に伝わらなかった事を示しているよう。

このような理由から山地性文化が南九州を経由して南島に伝播したと考えられるが、照葉樹山地型の先にあげた五つの文化も伝播にいくつかの新旧の波があったと思われる、その古いと思われるものから記してみよう。

基層文化の中にも海や山の環境には災厄を与える神が多くいたが、中でも山はそうした災厄神が多くいて、山中で、またしばしば山を下って人々に厄害を加えたのだが、人々はそれを自分たちの生活を守護してくれる神に変換させ馴致したものである。これが③の祈禱に山を下る棒振り神や④のシヌグの山を下る柴草を着た神、⑤の赤マター・黒マターがみな恐ろしい相貌をもつ理由となっていると思われる。

こうした恐ろしい、同時にまた善神でもある神々の住む山が神山である。九州南端の薩摩半島、大隅半島には神山として多くの森山、森どんが分布する。この分布は島々を南下して奄美大島、徳之島に多くの森山が分布することは先に説明した。そして沖縄本島北部国頭には森とも嶽とも併称された山上の御嶽がある。この国頭地方の山上の御嶽は、後に沖縄本島中南部の海洋性平地型の文化にとり入れられて平地の御嶽が成立することになる。

そうして先に説明した子供組や青年組などの男性年齢階梯組織による祭祀は奄美大島から沖縄本島北部へ、八重山諸島へと山地を選びながら南下した。この南島でも特異な男の祭祀組織の背景となっているのは焼畑や山樵という生業である。

野元寛一氏の奄美大島大和村の焼畑(8)の研究によれば、山地の耕作はすべて山地バテ、シマバテという焼畑で椎などの樹林を伐って焼くもので作物はみな里芋、甘藷、コーシャ（栽培用山芋）を連続または交代して二年から四年作るものであった。先に記したように大和村の諸集落は旧暦十一月の冬折

目というコーシャをはじめ芋類の祭りが盛んで、この日は元は山上で鉦の音が聞えるので人々は恐れた。この山の神の鉦は山畑の芋の農作を祝うものではなくて、人々が焼畑で山地を侵害することへの怒りの警鉦だったにちがいない。

この奄美の冬折目、沖縄本島北部の芋折目は九州本土の霜月祭りと同様に連鎖していて、この冬祭りも芋の焼畑も九州山地文化の南下と理解できようと思う。山芋、里芋の焼畑が九州山地から南島へ伝えられたというにはなお疑問があることは事実である。

それに対して樵業が山地文化として島伝いに南下したことは、奄美大島の定規持ち神の来訪や沖縄本島北部の国頭でも同様な例があり、これが九州本土の建築儀礼にも類似した例があることから、より確かなものに思われる。

山地文化が九州から南下したことを最も鮮明に示しているのは先に説明したように負い運搬の文化である。頭負い運搬が焼畑や樵業と共に南下した姿が目に見えるような分布と言えよう。

このようにして照葉樹山地性の諸文化が山地文化複合を作りながら数次にわたって南島の山地を選んで南下し定着したと思われる。

三、海洋性平地型文化の成立

沖縄本島を中心に歴史はマキヨの時代から按司の時代、三山時代、尚巴志の三山統一、第二尚氏の尚眞による沖縄の中央集権へと進んでいく。この歴史進展の舞台は沖縄本島中南部の私という海洋性

平地であった。ここに平地型の文化が成立してくる。この文化成立の基盤としては琉球海外貿易の発展であるが、この文化はその貿易の対手国の中国や南海諸国の文化を直接に学んだものでなく、新しく創出したというのが正しいであろう。

女性神役組織が確立してくる。これは基層文化の中にみられたオナリ神が昇格され組織化されて根神、ノロ、そして国王のオナリ神を聞得大君としてその頂点におく組織化がなされたのである。

海の彼方に理想郷ニライ・カナイがあるとすると世界観も成立した。これには後に方向を東方と限定するアガルイ・テダガアナという理想郷も考えられ、先に⑧に記した久高島のカンジャナシーではニライ大主をさておいてアガルイの大主が神々の総指揮をとる形になっている。奄美大島から伊平屋島にかけて海の理想郷としてテルコ（ナルコ・テルコ）という国が考えられ、しばしばテルコとニライとを混同している。海の彼方の国には地域性や変遷があつて複雑だが、山上の他界の暗く恐ろしいのに比べて、みな明るく開放的であると言える。この海彼の国からの来訪神事のためにノ口神女組織には来訪神になる（演ずる）ためのオナリ神系でない、特殊な歌謡や演劇や憑依などの能力のあるアスビ神が新しく附加されたことは久高などでみられる通りである。

こうしたノ口神女組織の祭場としては先に記したように照葉樹山地性の文化である沖縄本島北部国頭地方の山上のお嶽をとり入れて平地の御嶽が作られて祭場となった。この平地の御嶽はさらに遠い聖地を拝み、お通しをする祭場という新しい性格をもつこととなった。

この海洋性平地文化の農耕が麦中心であったことは先に説明した。沖縄圏の稲作が日本本土のような夏作としてでなく、冬作として栽培されてきたことは驚くべきことだが、これはおそらく、沖縄本島中南部で盛んな麦作にならって稲作を行なった（播種儀礼を同期に行なった）ことに由来するのではないかと思う。それほど麦は主導的作物だったと言える。

さて照葉樹山地文化と海洋性平地文化とがそれぞれ対立した形で定着し成立したのであるが、琉球王国の文化としては平地性文化の方が代表していて、そのノロ女性神役組織や祭事は国の支援によって南島に広く行なわれることになった。沖縄本島北部国頭地方や、奄美大島などの山地性文化の地にも平地性文化のノロ神女組織が進出したのである。ここにいわば異文化の接触現象の珍しい祭事が現われることになった。

沖縄本島北部のシヌグとウンジャミの対立と奄美大島北部の秋名などのシヨチュガマとヒラセマンカイの併立である。このうちシヌグ（④）とシヨチュガマ（⑥）は照葉樹山地の祭りだが共にこの地に古くから伝承したものである。それに対してウンジャミ（⑫）とヒラセマンカイ（⑬）は海洋性平地型の祭りの形をもって、それらに対応し、同じ目的をもった女性神事組織の祭りとなっており、いろいろの点からより新しい成立であることも考えられる。古くからの男性集団によるシヌグ、シヨチュガマがある所へ、女性神役組織が作られると、それに対応する意味から同じ目的のしかし神遊び性の強いウンジャミ、ヒラセマンカイを作ることになったのであろう。異型文化の接触現象の例とし

て興味深い。

- (1) 平良豊勝『喜如嘉の民俗』一九七〇、一四八頁
- (2) 佐喜真興英『南島説話』
島袋源七『山原の土俗』
- (3) 喜舎場永珣『八重山民俗誌』一九七七
- (4) 『沖縄県久高島の祭り』（古典と民俗学叢書Ⅴ）一九八一
- (5) 甲南大学地域文化研究会『地域文化研究第四号』一九八一
- (6) 琉球大学民俗研究クラブ『沖縄民俗19』一九七二
- (7) 沖縄県教育委員会文化課監修『沖縄の民俗資料』
上江州均『沖縄の暮らしと民具』一九八二
- (8) 野元寛一『生態民俗学序説』一九八七、一一二頁